

ダンブルドアはゲイだった？

——「ハリー・ポッター」シリーズにおける男たちの系譜——

菱 田 信 彦*

“I always thought of Dumbledore as gay”

Male Bonding in “Harry Potter” Books

Nobuhiko HISHIDA

要 旨

本論は、J・K・ローリングによる「ハリー・ポッター」シリーズをクィア批評の視点から分析することを目的とする。2007年、ローリングが「ダンブルドアはゲイだった」と発言して大きな話題となった。この作品には明示的に同性愛者として描かれるキャラクターは登場せず、その点でクィア批評の研究者から批判されたこともあるが、ダンブルドアが同性愛者であるとするれば、他にも同性愛であることが暗示されたキャラクターが存在する可能性がある。ダンブルドアを中心とする、クィアな性向をもつ数人の男たちが動かしていく物語として捉えることは、「ハリー・ポッター」シリーズに新たな解釈の可能性を開く。

ハリー自身については、女子生徒との恋愛も描かれてはいるが、ダンブルドアなど男性への彼の「執着」の方が物語上重要な意味をもっており、その最大の対象は親友のロンである。彼はロン、ハーマイオニーと3人で行動するが、ロンとの関係の方に重きがあることは明らかで、その一方ハーマイオニーは恋愛対象としてはけっして問題化されない。ハリーが同性愛的指向をもつキャラクターとして描かれている可能性は否定できない。

ハリーは最後にロンへの欲望を放棄し、彼の妹ジニーと結婚して異性愛者として生きることになる。この結末を選んだローリングの意図はどこにあったのかを探る。

キーワード：イギリス小説、児童文学、「ハリー・ポッター」シリーズ、クィア批評

はじめに

「ハリー・ポッター」シリーズの最終巻である『ハリー・ポッターと死の秘宝』(*Harry Potter and the Deathly Hallows*, abbr. *DH*) が刊行されて間もなくの2007年10月、ニューヨークのカーネギー・ホールで開催されたファンとの交流会において、作者J・K・ローリングが「ダンブ

*教授 英文学

ルドアはゲイだった」と発言し、大きな話題となった。イギリスの『ガーディアン』紙はその状況を次のように伝えている。

A 19-year-old from Colorado asked about the avuncular headmaster of Hogwarts School: ‘Did Dumbledore, who believed in the prevailing power of love, ever fall in love himself?’

The author replied: ‘My truthful answer to you . . . I always thought of Dumbledore as gay.’ The audience reportedly fell silent—then erupted into prolonged applause. (21 Oct. 2007)

『ガーディアン』によると、続いてローリングはこのように述べたそうである。

Dumbledore fell in love with Grindelwald [a bad wizard he defeated long ago], and that added to his horror when Grindelwald showed himself to be what he was. To an extent, do we say it excused Dumbledore a little more because falling in love can blind us to an extent, but he met someone as brilliant as he was and, rather like Bellatrix, he was very drawn to this brilliant person and horribly, terribly let down by him. (21 Oct. 2007)

悪の魔法使いグリンデルバルドを倒したことは、ホグワーツ魔法魔術学校の校長、アルバス・ダンブルドアの偉業のひとつに数えられている。ところが最終巻において、『日刊予言者新聞』の記者リタ・スキーターが著した彼の伝記によって、ダンブルドアはじつは若いころグリンデルバルドと親交があり、ゴドリック谷のダンブルドアの実家で一緒に魔法の研究にふけていたことが暴かれる。ある日彼らの意見が対立したことから争いが起こり、それがダンブルドアの妹、アリアナの死につながる。このことはその後のダンブルドアの生涯に決定的な影響を与える。

しかしながら、上でローリングが述べているように、ダンブルドアがグリンデルバルドに「惹きつけられた」のが恋愛感情によるものでもあるとすれば、このエピソードのもつ意味は大きく変わってくる。そればかりか、その後のダンブルドアの（ハリーを含む）何人かの男性キャラクターとの関係をも問い直す必要が出てくる。本論では、ダンブルドアを同性愛的指向をもつキャラクターとして捉えることが「ハリー・ポッター」シリーズの解釈にどのような影響を及ぼすかを分析する。

1. クィア批評による「ハリー・ポッター」読解

「ハリー・ポッター」シリーズをクィア批評によって、すなわち性的少数者の視点から読み直す試みは、これまでもなかったわけではない。ゲイの男性研究者であるタイソン・ピューとデイビッド・L・ウォレスは、2006年、つまりシリーズの第6巻までが刊行された段階で発表された論文において、「ハリー・ポッター」シリーズに明示的な同性愛者がまったく登場せず、パーティなどのカップルもつねに異性どうしであることは「21世紀社会を説得力をもって描くために必要なはずの相当数の登場人物を抹消している」(Pugh and Wallace 264)と批判している。その上で彼らはシリーズにクィアの視点が描き込まれている可能性を探っていく。

ピューとウォレスは、まず、11歳になるまでのハリーが階段の下のカップボードで暮らしていたことに注目する。彼らは、カップボードから出てきたハリーが魔法使いという真のアイデンティティに目覚めることは、同性愛者が自分が同性愛であることを自覚し、その性的指向にそって生きようと決意する“coming out of the closet”という行為を思わせるとして、次のように論じている。

When we first meet him, Harry lives in a dark cupboard (SS 19-20), which seems analogous to the closeted lives of homosexuals who do not publicly reveal their sexual orientation. Further, had Harry not attended Hogwarts as a wizard, he was to attend “Stonewall High, the local public school” (SS 32), a detail that invites the queer reader to wonder whether Rowling, who is often playful and suggestive in her choice of names, was aware of the homosexual connotations of *Stonewall*. (Pugh and Wallace 264-65)

ニューヨークのグリニッジビレッジにストーンウォール・イン (Stonewall Inn) というバーがあるが、1969年ここで同性愛者と警官隊の衝突が起こり、それ以降ストーンウォールは同性愛者解放運動を象徴する名となった。上のようにピューとウォレスは、ホグワーツに行かなければストーンウォールに行っていた、というこの設定は、マグル社会の中で魔法使いとして暮らし、しかもそのことを自覚しないまま周囲との軋轢を引き起こしていたハリーの状況が、異性愛を規範とする社会の中で同性愛者として暮らし、しかもそのことを自覚していない、もしくは公言できずにいる人々の状況に似通ったものとして描かれていることを示唆している、と主張するのである。さらに彼らは、ハグリッドに連れられてロンドンのダイアゴン横丁へホグワーツに必要な品を買いに行くハリーの姿は、カミングアウトしたために故郷の町にいらなくなり、先達によってロンドンの同性愛コミュニティにいざなわれる同性愛者の姿に重なる、

と論ずる。(Pugh and Wallace 266)

またピューとウォレスは、ハリーとともに暮らすダーズリー家の人々が抱く不安が、ハリーの魔法そのものに対する不安というよりも、むしろ彼が魔法使いであることを近所の人や親戚などに知られることへの不安であることを指摘し、これは異性愛規範社会の人々が示す「ホモフォビア」にきわめて近い、と述べている。『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』(*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*)の冒頭でマージ伯母がダーズリー家を訪れたとき、ハリーが「ノーマル」にふるまうよう要求される場面をとり上げ、彼らは次のように論じている。

Prior to Aunt Marge's visit to the Dursleys, Harry promises to behave in front of her: "I'll act like a Mug[gle]—like I'm normal and everything" (PA 21). Harry's concession here—his agreement to deny his identity as a wizard for the sake of familial peace—is doubtlessly familiar, in concept if not in practice, to any queer reader who has been forced to pass as heterosexual in certain situations. (Pugh and Wallace 266)

このように、ピューとウォレスは、はっきり同性愛者として描かれるキャラクターが誰もいない「ハリー・ポッター」シリーズにおいて、なお、マグルの価値観を主流とする社会にあって魔法の世界が少数のクィアとして機能し、マグルの世界から魔法の世界へ移行するハリーの視点が規範的価値観をさまざまな形で揺るがす可能性を読みとろうと模索している。ここまで精緻な分析を重ねたあげく、作者本人の口から「ダンブルドアはゲイだった」と聞かされたのでは、彼らとしては立つ瀬があるまい。

ローリングの発言を受けて、ピューとウォレスは2008年に前述の論文の「追補編」を発表し、その中で、もしローリングがダンブルドアをゲイと考えており、またそれがストーリー上重要だというのであれば、彼女はなぜ作品中でそのことに言及しなかったのか、と疑問を呈している。そして、7巻にわたって膨大な語数を費やして語られた物語の中で最後まで彼の性的指向を隠蔽し続けたことは、まさにダンブルドアを「クローゼットに閉じ込める」行為ではないか、と指摘する。

Gays are second-class citizens in the Harry Potter world if the defining feature of their difference is hidden from view, and Rowling's after-the-fact declarations cannot eclipse this two-tiered world of her fictions, in which heterosexuality is celebrated and homosexuality is silenced. Indeed, in some ways Dumbledore's outing could retroactively cast a negative light

ダンブルドアはゲイだった？

on homosexuality, given his own statement that Harry is “the better man” (713). (Pugh and Wallace, “Postscript” 191–92)

ローリングの発言に対するピューとウォレスの批判はまことにもっともだ。それでも私は、ダンブルドアをゲイであると措定することによって、この作品についてさまざまなことが新たに増えてくると思っている。そしてローリングは、ダンブルドア以外にも、ゲイである可能性のある人物をピューとウォレスが考えるより多く描き込んでいるのではないかと思うのである。

2. ダブルドアが「気にかけて」男たち

『死の秘宝』の第28章において、ダンブルドアの弟であるアバーフォース・ダンブルドアが初めて登場する。ダンブルドアから託された任務について彼に語るハリーに、アバーフォースは “Funny thing, how many of the people my brother cared about very much, ended up in a worse state than if he’d left ‘em well alone.” (DH 454) と述べる。アバーフォースはなぜか、異性愛者であると強く感じさせる人物だ。そして、ダンブルドアが同性愛者だということを知っている存命の登場人物があるとすれば、アバーフォースは間違いなくその1人だと考えられる。

ダンブルドアが「たいそう気にかけて」(cared about very much) というアバーフォースの表現は、彼が同性愛者だとすればこれまでの解釈とは違う意味合いを帯びてくる。そしてむろんハリーも気にかけてられた人々に含まれる。『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』(Harry Potter and the Order of the Phoenix, abbr. OP) の第37章で、ヴォルデモートに対抗する自らの計画についてハリーに説明しているダンブルドアは、その計画の「欠陥」について次のように述べている。

‘I cared about you too much,’ said Dumbledore simply. ‘I cared more for your happiness than your knowing the truth, more for your peace of mind than my plan, more for your life than the lives that might be lost if the plan failed. (OP 739)

これはダンブルドアの人間性をうかがわせる感動的なセリフとして解釈することもできる。しかし魔法世界の運命がかかった計画よりも一人の生徒の心情を優先したというこの発言には、どこか度を越したものがある。そしてハリーに対するダンブルドアのこうした対応が特別なものであることは、ハリーとともに危険な探索をさせようとしているロンへの態度と比べてみれば明らかだ。『死の秘宝』の第7章にはロンとダンブルドアの関係について、“as far as Harry

knew, Ron and Dumbledore had never been alone together, and direct contact between them had been negligible.” (DH 105-06) という記述があり、彼らの間に個人的な交流がほとんどないことをうかがわせる。ダンブルドアに男性への恋愛感情を抱く性的指向があり、それがしばしば彼の行動を左右していると考えれば、上の引用のようなハリーに対する態度はよりすっきりと解釈できる。

ダンブルドアがとくに気にかけてと考えられる人物は、彼自身の家族とハリーを除けば、まずグリンデルバルドだ。これについてはローリング自身が言及している。次はトム・リドル、すなわちヴォルデモートである。ダンブルドアは自らトムを孤児院へ迎えに行き、トムの危険な性向をできるだけ矯正しようと試み、入学後も何かと彼を気にかける。次はハリーの父ジェイムズの親友で、ハリーの名づけ親であるシリウス・ブラックだ。ダンブルドアは、無実の罪で魔法省に追われている彼を救うため、非法手段まで用いて策を講ずる。そこまではまだ分かるとしても、『不死鳥の騎士団』でシリウスの実家であるグリモールド街12番地の屋敷を騎士団の拠点としたとき、ダンブルドアは他のメンバーにさまざまな任務を与える一方、シリウスには屋敷から出ないようにきつく戒める。そのことが逆にシリウスを追い詰め、結果として彼の死につながることとなる。

さらにhogwartsの魔法薬学教授、セブルス・スネイプもそうした人物の1人だと考えられる。ヴォルデモートに仕える「デス・イーター」の1人だったスネイプがそのことを悔いてダンブルドアのもとに戻ってきたとき、彼はスネイプを迎え入れる。その後も騎士団の他のメンバーがスネイプが本当に帰順したのかどうか疑う中、ダンブルドアだけが彼を疑う言葉にいつさい耳を貸さず、そればかりか他のメンバーには打ちあけないことをスネイプに打ちあけ、彼だけに特殊任務を託す。ダンブルドアがスネイプを信頼する理由としては、彼がハリーの母リリーを深く愛しており、自分の行為が彼女の死を招いたことを心から悔いているとダンブルドアは知っていたから、と説明されてはいるが、やはりどこか極端なものを感じる。ダンブルドアがスネイプに対しても特別な感情を抱いていたというのはあり得ることである。

そしてダンブルドアと、彼が「気にかけて」男性たちには、ある共通点がある。結婚しておらず、作品の完結より前に子孫を残さず最期を迎えることだ。そしてそれ以外にもどこか同じ「匂い」を感じさせるところがある。

シリウスを例にとってみよう。『不死鳥の騎士団』の第28章でハリーがスネイプの学生時代の記憶をのぞき込んだとき、シリウスは“looking rather haughty and bored, but very handsomely so” (OP 568) と描写されている。このようにシリウスは、ジェイムズを中心とする4人の仲間たちの中で最も容姿が優れている。さらにいつも退屈そうでもの憂げで、「ダン

ダンブルドアはゲイだった？

デイ」という形容がぴったりくる。ダンディとして有名だったオスカー・ワイルドが同性愛の罪で投獄されたように、このイメージは同性愛との結びつきを強くもっている。

さらに同級生の中でも飛びぬけてハンサムであるにもかかわらず、彼が女性に関心を示したり交際したりという描写はまったくないし、結婚もしない。ハリーと会った後も、彼が学生時代の思い出として語るのはジェイムズのことばかりで、たとえばハリーの母リリーへの言及はほとんどない。またシリウスは、容貌が父親そっくりのハリーをジェイムズと「混同している」と騎士団の他のメンバーからしばしば指摘される。『不死鳥の騎士団』第14章で、ハリーに会いに危険をおかしてホグズミード村まで来ると言いだしたシリウスをハリーが止めたとき、シリウスは次のような反応を示す。

‘You’re less like your father than I thought,’ he said finally, a definite coolness in his voice.

‘The risk would’ve been what made it fun for James.’ (OP 273)

このようにシリウスは、ハリーが自分の期待するほどジェイムズに「似ていない」ことに失望している。スネイプがリリーを愛するがゆえにハリーを救ったのと同様、シリウスはずっとジェイムズを愛していたのであって、彼がアズカバンに再収監される危険をおかしてまでハリーを助けるのも、名づけ子とはいえほんの短期間しかともに暮らしていないハリーに全財産を遺すのも、その愛ゆえだと思われる。

これらの男性の中で、女性への恋愛感情が唯一語られるのはスネイプだ。しかし、彼のリリーに対するほとんど「ストーカー」的なつきまとい方や、彼女の死後、息子ハリーに対して愛憎がない交ぜとなった複雑な感情をずっと隠して接し続ける様子を見ると、どうしてもスネイプが「一般的」な異性愛者だとは思えない。彼もまた規範的な異性愛からどこか外れたクイアな存在なのではないかと考えられる。

このように、ダンブルドアが「とくに気にかけて」男性たちは、それぞれ傾向は異なるものの、規範的な異性愛に収まりきれないクイアな性的指向をもっている。そして彼らはその欲望の対象にすさまじいまでの執着を示す。それはダンブルドアでさえ例外ではない。彼はグリンデルバルドへの執着によって妹を失い、弟と仲たがいに、孤児トム・リドルへの執着によって結果的にヴォルデモートを生み出し、ハリーへの執着によってヴォルデモートに対抗する計画を危うくし、最後には「死の秘宝」への執着によって身を滅ぼす。『死の秘宝』の第35章で、ハリーの「夢」の中で彼と語りあったとき、ダンブルドアは慙愧の念とともに自分がいかに誘惑に弱かったかを告白している。(DH 575)

そして、こうして考えてみると、まさに「彼ら」こそ「ハリー・ポッター」シリーズの物語全体を動かす存在であることに気づく。つまりこの物語は、クィアな性的指向をもち、ダンブルドアを中心にホモセクシュアル、あるいはホモソーシャルな絆で結ばれた数人の男たちが、彼らの欲望の対象に執着することによって動いていく物語なのである。そう考えると、ピューとウォレスが主張するように、ローリングがこの作品からクィアなものを排除しているとはとうてい言えなくなる。さらにローリングの「ダンブルドアはゲイである」という発言がいかに決定的なものであるかも見えてくる。

3. ハリーの欲望とその放棄

では、ハリーは彼らとは違うのだろうか。作品をざっと読んだかぎりでは「同じだ」と言いたくなる。ハリーはたしかにレイブンクロー寮のチョウ・チャンやロンの妹のジニーに恋愛感情を抱き、最終巻ではジニーと結婚して子どもをもうけている。しかし、物語全体を眺めわたせば、ハリーの「恋愛話」がいわば添え物だというのは一目瞭然だ。彼が男性に執着を示す場面の方がはるかに多く、ストーリー上も重要な意味をもっている。それはシリウスやダンブルドアなど父親的な立場の相手に対してだけではない。そのことを端的に示すのが、ロン、ハーマイオニーとのハリーの関係である。

ハリーはこの2人とほとんどいつも一緒にいるが、ロンとの関係の方がハリーにとってより本質的なものであることはさまざまな場面で示されている。『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(*Harry Potter and the Goblet of Fire*, abbr. *GF*)でハリーがトライ・ウィザード・トーナメントの代表選手に選ばれ、そのことで感情を害したロンがハリーと口をきかなくなったとき、ハリーはこのように感じている。

Harry liked Hermione very much, but she just wasn't the same as Ron. There was much less laughter, and a lot more hanging around in the library when Hermione was your best friend. (*GF*278)

ハーマイオニーももちろんハリーにとって大切な親友なのだが、それでも彼女は「ロンと同じではない」のである。

そして『死の秘宝』で、ハリーとロン、ハーマイオニーは、ヴォルデモートが自分の魂の欠片を封じ込めた「ホークラックス」と呼ばれるいくつかの呪物を探す旅に出る。ロンは、当たらない苛酷な旅と身につけているホークラックスの侵蝕によって鬱屈をつのらせ、ハリーと

ダンブルドアはゲイだった？

ハーマイオニーの仲を疑いはじめる。ある日ふとしたことから口論が始まり、とうとうロンはハリーとハーマイオニーを置いて去ってしまう。

その後何週間も、ハリーとハーマイオニーは2人だけで旅を続ける。ここで私たちは奇妙なことに気づかざるを得ない。ともに17歳の年頃の男女が同じテントに暮らしているのに、性的なことはまったく問題化されないのである。もちろん、ジニーに恋しているハリーは他の女子に手を出すことはしないのだろうと思わせるような工夫はされている。しかし、人気のない荒野で彼らが2人きりで過ごすことの「危うさ」が言及さえされないのはやはり不自然である。

第19章で、ハリーたちが探し求めていたグリフィンボールの剣が、森の中の凍った池の底に沈んでいるのが見つかる。剣を手に入れるために池に潜ったハリーは、身につけていたホークラックスの鎖に首を絞めつけられて死にそうになる。そのとき思いがけずロンが現れ、池に飛び込んでハリーを救う。その際のハリーの心情は次のように描写されている。

There was a pause, in which the subject of Ron's departure seemed to rise like a wall between them. Yet he was here. He had returned. He had just saved Harry's life. (DH 303)

ハリーにとっては、それまでの経緯がどうあれ、ロンが自分のもとに戻ってきたということだけが重要なのである。そしてハーマイオニーの反応はさらに激烈だ。ハリーがロンをともなってキャンプに帰ると、彼女は狂ったように叫びだす。

'I came running after you! I called you! I begged you to come back!'

'I know,' Ron said, 'Hermione, I'm sorry, I'm really—'

'Oh, you're *sorry*!'

She laughed, a high-pitched, out-of-control sound; Ron looked at Harry for help, but Harry merely grimaced his helplessness. (DH 310)

ハリーとハーマイオニーは、お互いの間では性的なことが問題にならない代わりに、ロンという欲望の対象を共有し、奪い合っているかのようだ。批評家イヴ・コゾフスキー・ゼジウィックは「欲望の三角形」という概念を用いて「ホモソーシャル」、すなわち異性愛規範社会における男性どうしの絆を分析している。簡単にいえば、三角形の2辺が男性であり、その2辺が交わる頂点に欲望の対象としての女性が存在する場合、男性どうしの間、すなわち底辺にも女性への欲望に劣らぬ強い心的結びつきが生ずるとするものである。ローリングは、この有名な

構図をおそらく意図的に改変して、同じ男性を欲望の対象とする男女の絆を描いてみせることにより、ハリーの性的指向が本質的にクィアなものを含むことを暗示している。

こう考えてみると、ジニーに対するハリーの「恋愛感情」も、本当にジニーという女性への欲望なのだろうか、という疑義が生ずる。ジニーへのハリーの思慕は『ハリー・ポッターと謎のプリンス』(*Harry Potter and the Half-Blood Prince*, abbr. *HP*)で初めて明示される。第7章の Hogwartz 急行車内での描写で示唆されているが、それが顕在化するのには第14章において、ジニーがボーイフレンドのディーンと抱き合っけてキスしているところをハリーとロンが目撃する場面である。その際のハリーの感情は次のように描写されている。

It was as though something large and scaly erupted into life in Harry's stomach, clawing at his insides: hot blood seemed to flood his brain, so that all thought was extinguished, replaced by a savage urge to jinx Dean into a jelly. (*HP* 268)

ディーンは寮でハリーと同部屋で、いつも親しくしているが、ハリーはここでジニーとキスしている彼に憎しみを燃やし、呪文で姿を変えてやりたいとさえ思っている。しかしながらこの『謎のプリンス』という作品において、この場面より前にハリーがジニーと会話する場面は5回もない。そしていずれもかなり短く、平板なやりとりである。ハリーたちとときどき冒険をともにする風変わりな女子生徒、ルーナ・ラブグッドとの会話の方がずっと多く、内容も豊かだ。どう考えてもジニーは、物語の主人公であり魔法世界を救う英雄であるハリーの恋愛対象になりそうな女性キャラクターとしての描き方をされていない。そのためわれわれは、上に引用したようなハリーの感情の発露を目にして、非常に唐突な印象を受けるのである。

実は同じ14章の少し前の場面で、ハリーはロンとハーマイオニーの仲が急速に進展するのを目の当たりにしている。ハーマイオニーは新任の魔法薬学教授、スラグホーンのパーティに招かれているのだが、一緒に行かないかとロンを誘う。それを聞いていたハリーは、2人がこのまま男女の間柄になったら、自分はそこから締め出されてしまうのではないかと不安を感じる。(HP 264-65)

ジニーへの思いをハリーが意識するのがこの場面の直後だということは注目に値する。ハーマイオニーがロンと結婚すれば、彼女はロンに対してハリーよりずっと近い立場に立つことになる。その状況でロンとの距離を縮めるためにできることがあるとすれば、ハリー自身がウィーズリー家の一員になることしかない。そのための唯一の手段はジニーと結婚することである。ハリーはむろん自覚していないが、ジニーに対する思慕は、ロンとハーマイオニーの恋

ダンブルドアはゲイだった？

愛関係が次第に顕在化していく中で、ロンとの絆を確保しておくための「迂回路」だったのではないだろうか。

このように、ハリーが同性愛的指向をもつキャラクターとして描かれている可能性はけっして否定できない。その場合彼は、親友に恋しており、その親友は異性愛者であるという、名づけ親のシリウスと同様の立場にあることになる。では、ハリーをダンブルドア、グリンデルバルド、ヴォルデモート、シリウス、そしてスネイプという「男たちの系譜」から差異化するものは何なのだろうか。それは、ハリーの探索の旅が、ヴォルデモートに対抗する力を得るためのものではなく、力を「手放す」ためのものであることに象徴されている。ハリーがホークラックスを探し求めるのは、それを消滅させるためだ。自分が正当な主人となった無敵の杖、「ニワトコの杖」も使わないことを選ぶ。それどころかハリーは、自分の中に寄生したヴォルデモートの魂の欠片を減ほそうとして、彼に殺されるために進んでその攻撃に身をさらす。ダンブルドアが語っているように、ハリーの最も優れた資質、そしてヴォルデモートに対抗するための最大の武器は、力への渴望にとらわれない彼の無欲さなのである。(HP 477-78) そして性的な欲望ということについても、彼は『謎のプリンス』の終盤で、ホークラックスを探す旅に出るため、やっと気持ちが通じ合ったジニーに別れを告げる。(HP 602-03)

さらに『死の秘宝』において、ハリーは彼の最大の欲望の対象と思われるものを手放す。グリフィンドールの剣でホークラックスを減ほそうとするロンに対して、ホークラックスは睦みあうハリーとハーマイオニーの幻を見せる。それはロンの心の奥底にあった不安が顕現したものである。その幻を克服して剣をホークラックスに突き刺したロンに、ハリーは次のように語りかける。

‘She’s like my sister,’ he went on. ‘I love her like a sister and I reckon she feels the same way about me. It’s always been like that. I thought you knew.’ (DH 308)

ハリーがここで手放すのは、ハーマイオニーと恋愛関係になる可能性ではない。彼にその気がないことはそれまでの経緯から明らかだ。彼はむしろ、ロンをハーマイオニーに手渡すことによって、ロンへの欲望が実現する可能性を放棄するのである。この後、彼ら3人の間でそれまでのような感情の行き違いが起ることはなくなり、それが彼らの最終的な勝利につながる。このように、ハリーにとってヴォルデモートの攻撃に身をさらすことと同様に、あるいはそれ以上に大きな「自己犠牲」は、彼がヴォルデモートに勝利するためにクリアすることが欠かせないハードルのひとつとして描かれるのである。

まとめ

これまで述べてきたように、グリーンデルバルドに対するダンブルドアのクィアな欲望によって幕を開けたこの物語は、ハリーがロンに対するクィアな欲望を放棄することによって幕を閉じる。ここに私たちは何を読み取るべきだろうか。規範的な異性愛から外れた性的指向に対するローリングの偏見だろうか、それとも、力を持つ男性どうしがお互いを欲望しあうことによって世の中を動かしていくホモソーシャルな社会に対する批判だろうか。そして最終章「19年後」でジニーと幸せな家庭を築いているハリーを私たちはどう見るべきなのだろうか。自己犠牲に徹したヒーローがそれにふさわしい平安を享受している姿だろうか。それとも本来の性的指向を封印したハリーが、再び「クローゼット」に閉じこもったと解釈すべきなのだろうか。いずれにせよ、およそあらゆる批評理論を意識的に作品にとり込んでいるように見えるローリングが、あたかもhogwartsの「必要の部屋」のように、クィア批評に対しても広大な空間を作品内に用意していることだけは間違いないようだ。

参考文献

- Pugh, Tison, and David L. Wallace. "Heteronormative Heroism and Queering the School Story in J. K. Rowling's *Harry Potter* Series." *Children's Literature Association Quarterly* 31(3): 260-281, 2006.
- . "A Postscript to 'Heteronormative Heroism and Queering the School Story in J. K. Rowling's *Harry Potter* Series'." *Children's Literature Association Quarterly* 33(2): 188-192, 2008.
- Rowling, J. K. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury, 1997.
- . *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. London: Bloomsbury, 1998.
- . *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. London: Bloomsbury, 1999.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury, 2000.
- . *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. London: Bloomsbury, 2003.
- . *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. London: Bloomsbury, 2005.
- . *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury, 2007.
- セジウィック, イヴ・K, 『男同士の絆: イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗・亀澤美由紀訳, 名古屋大学出版会, 2001.
- Smith, David. "Dumbledore was gay, JK tells amazed fans." *Guardian* 21 October 2007.